

彫刻素材の開発と表現法の研究—馬門石造形見本の実践

Development of a Sculpture Material, and Research of the Eexpressing Method

—Practice of a Makado Stone Construction Modeling Sample—

教育学部 美術教育講座 教授 本田貴侶

Department of education , Fine-arts educational lecture , Professor Takatomo HONDA

《研究概要》

①アーティスト・インレジデンス in 宇土の開催

熊本県宇土市の公共の広場に、より芸術性の高い作品を設置し空間に活力を与え人々の憩いの場を出現させることを目標とし「アーティスト・イン・レジデンス in 宇土マリーナ」他、関連事業が3年間の期間を経て開催され、2005年夏に一つの区切りを迎えた。本事業に筆者は当初より企画・運営アドバイザーとして参画した。

アドバイザーとしてプランニングした具体的内容は、

1. 宇土地域の残された文化財及び馬門石の造形物の調査
2. 地元の素材としての特性を活かした馬門石の造形方法及び技法の研究
3. イン・レジデンスによるホームステイのあり方と工夫
4. 制作時の一般公開とコミュニケーションの活用（市民との交流）
5. 宇土市の各種文化団体、サークル等との交流
6. 社会教育・公教育との造形活動の連携（コラボレーション）
7. 文化行政としてのアーティスト・イン・レジデンスの推進
8. 公開シンポジウムによる討論の成果とパブリックアートとしての位置付け
9. シンポジウムテーマと各制作の連動と方向性
10. 作品のプレゼンテーションの工夫による環境の活性化と演出

等、多様な市民生活と文化・芸術に関わるテーマと課題を掲げ、多くの成果をもたらすこととなった。

②造形見本制作の依頼

二回に渡る宇土国際彫刻シンポジウムにおいて、彫刻の素材としての馬門石の優秀性が証明された。5t～7tに及ぶ野外彫刻が完成し、国際レベルの技法が十分通用し、高度な造形性と表現の深さが受け入れられる素材であることが解った。その結果、馬門石をより多くの人に知ってもらい、身近に感じてもらうと共に、地域の方にも馬門石で様々な造形活動が可能であるという彫刻表現の多様性を提示する意向があった。この宇土市の要請を受け、本研究室の学生と共に、造形見本を制作するに至った。



写真1 「太古の夢」 本田貴侶 2004年
宇土市中央公園 パブリックアート事例

③造形見本制作の実際

見本制作に当たっては、各テーマ内容に適した表現能力（傾向）を持った者を選考し、制作者とした。各制作のプロセスを重視し、デッサン及びエスキースから荒彫り、中彫り、仕上げとその過程ごとにアドバイスを加え、方向づけていった。具体的な制作者は埼玉大学教育学部美術教育講座彫刻研究室の学部生、院生、研究生の8名と著者によるテーマ設定とプランニングのもとで行なっていった。以下に具体的な見本制作の概要を記しておく。

《造形見本制作期間》

2005年1月～2月（実働25日）

《造形見本制作者》

表1に挙げた彫刻研究室の学部学生、院生、聴講生、研究生 計8名、著者 計9名

《見本点数》

学生各1点 著者2点 計10点

《見本サイズ》

基本的に 300×300×300mmサイズほどの馬門石を使用、個人差あり

《制作に用いた道具、用具》

彫刻用のみ（せん頭のみ、平刀のみ、櫛刀のみ、半丸のみ）、ハンマー、石彫用つち、石彫用きり、石彫用やすり、ハンドグラインダー、ディスクサンダー、くさび、ダイヤモンドカッター、砥石

《制作過程》

- ①テーマの設定②デッサン③石の切断④荒彫り
- ⑤中彫り⑥仕上げ⑦研磨

《造形見本制作の視点》

- ① 現代における彫刻表現のあらゆる方向性を提示することにより、表現の幅の広がりを示すこと
- ② 馬門石の特性を生かした表現を行うこと
- ③ それぞれの学生の持ち味を生かしたテーマを設定し、表現すること

《造形見本と考察》

造形見本は先の3つの視点をふまえ、近代以降の彫刻表現のあらゆる可能性を表現形態形式によって分類をはかった。つまり大きく具象彫刻と非具象彫刻(抽象彫刻)というモチーフに分け、見本制作を行った。ここでは三つの作品を取り上げて紹介する。

見本①『迷子』は最も具象的な表現である。先ほど挙げた分類の中の人体全身像の座像に当たる。始めに元の石の大きさを最大限に活かすことが重要である。荒取りの後、平たがねを多用し、細かな形を作っていた。その際、ゴム性のハンマーを用いることにより、石の割れ、欠けを少なくする事ができた。(馬門石、凝灰岩の特性)仕上げは金属製のやすりで、形を整えた後、サンドペーパーを用いた。何気ないポーズから具象表現の魅力と良さが表現されている事例である。

見本②『いつも一緒』はなるべく具象性をなくし、さらに着彩を施すことによって、ひとつのごろんとした石の塊から、ポップ・アートとの融合を図った。この見本は社会と美術の関わりの中から生まれたポピュラーなアートで、まさしく現代に生きる人間を表現したものとなった。技法としては出来るだけ大まかにラフに石のかたちをカッターで作し、明るい彩色を試み、次に削り出し、さらに磨きの作業を繰り返し行ない、何度かの繰り返しの中で馬門石にポップな人物が表現されることになる。彫りや磨きの部分を多くすればするほど、材質感が生まれることとなった。

見本③『フルーツ』では新しい表現法に合った題材として静物彫刻を提示する。石の持つ温かな色合いとやわらかな籠の曲線、そこに包まれる果物たちの調和から、ゆったりと流れる時間や易しい雰囲気磨いたり、削ったりすることで表現した。旧来の彫刻に見られない、日常的な空間からいつのまにかアートがしのびよってくる作例になった。

見本④『潮』は三角形の面の組み合わせによる構成を試みた抽象幾何学形態である。特に直線(幾何学形態)によるトライアングルな構成を主とし、出来るだけ主張を抑えて制作すると、静かな象造形が出現する。カッター、平ノミ、やすり、ピシャンなど様々な道具を使用し、それぞれの面を作った。球体に動きを出すため、カッターの跡を残し球体自体も場所によってやすりの番数を変えた。現代の環境空間に適した無機的な造形の

有り方を示す事例となった。



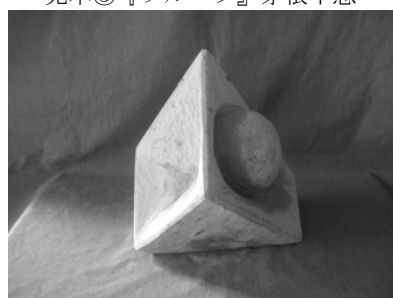
見本①『迷子』南島和也



見本②『いつも一緒』奥西麻由子



見本③『フルーツ』茅根千恵



見本④『潮』川上潮

④ 研究の成果と今後の課題

今回の試作としての造形見本制作には現代における彫刻表現の多様性を示すことにより、学生たちにとっての素材体験と新しい彫刻の題材開発が提案された。また宇土市の地域の方たちにとっても、開かれたアートの視点から地域の素材を見直すということを提示できたといえよう。

今後の課題として挙げられることは、このような取り組みを通して、学生たち自身がより様々な素材に積極的にふれ、また将来美術の教員として多様な素材を子どもたちに提供できるように指導する能力を養う必要がある。